

金子みすゞ

前号からのつづき

ある時、門司の船宿で休憩をし、汽船の出るのを待つていたら、七里和上の隣の部屋に行商人がいて、一所懸命帳簿を開いて算盤で勘定していたそうです。

ところが「船がでるぞ！」と船が出るぞ！」の聲が告げられると、その商人もただちに帳簿や算盤を行李に入れて、船に乗り込んだそうです。

○まずは願船に乗って



世間の多くの人は、生死の一大事を明らかにさせて頂くため「聴聞せよ」といわれても、「今は生活が忙しいから」と聞かないことが多いのです。

この商人のように一刻も早く船に乗ってしまえば、あせらずとも、さわがずとも、そのまま目的地に運ばれ、安心して銭勘定もできるのです。

浄土真宗のお念仏の世界では、この船を名付けて、「弥陀の願船」と呼びます。



杉山平一という詩人の「生」という作品に、
『ものを取りに部屋へ入
つて 何を取りにきたか忘
れて 戻ることにある 戻
る途中で ハタと思い出す
ことがあるが その時はこ
すばらしい 身体が先にこ
の世に出てきてしまったの
である その用事は何であ
ったか いつの日か 思い
当たることのある人は 幸
福である 思い出せぬまま
僕は すぐすあの世へ戻
る』
という詩があります。
何を取りに来たか忘れて
しまい、さっぱり思い出せ
ない。あきらめて部屋を出
たとところで、ハツと思い出
す。このときはどんなにか
嬉しいものです。
ところがこの詩のように
人間としての命を頂き、な
にか大事な用
事があつて生
まれてきたは
ずなのに肝腎



○南無阿彌陀仏に

が、ある近江商人の逸話です。実業家の遺言書を開封すると、儲けさせたい生をかける財産、分け合っていた大切な全財産と書かれ、さらに幾重にも丁寧な紙で包まれた。中から一枚の紙片が出てきた。

それは「南無阿弥陀仏」の六字の名号でした。一同はアツト驚きました。が、この「六字のお名号」こそは、また幾千万の人々に分け与えても、減ることのない徳宝であると、お念仏とともにこの遺言書を押したのだいたとのことでした。

